

Title	動詞呼応の類型(その一)
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 45 p.1-p.17
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80749
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

動詞呼応の類型 (その一)

出 口 厚 実

On the Typology of Nominal-Verb Agreement (1)

Atsumi DEGUCHI

The purpose of this study is to give an answer to the question of how verb agreement should be characterized in linguistic theory. This part (1) is concerned primarily with the ways in which the agreement of verb with nominals operates in a variety of typologically different languages, and attempts to establish some agreement patterns according to multiple factors which differentiate the types. The following points will be treated in more or less detail:

1. Realizations of agreement morpheme
 - a. constant segments: clitic, affix (prefix, infix, suffix)
 - b. phonological process
 - c. suprasegmentals
2. Deletability of free nominal
3. Number of agreement nominals (N_i) and agreement morphemes (n_i)
 - a. $N_1 V n_1$
 - b. $N_1 V n_1 n_1$
 - c. $N_1 N_2 V n_1 n_2$
 - d. $N_1 V n_1 n_2]_s s[N_2$
 - e. $N_1 N_2 N_3 V n_i n_j$
 - f. $N_1 N_2 N_3 V n_1 n_2 n_3$
4. Grammatical relations of nominal
 - I. a. Subject
 - b. Subject, Direct Object
 - c. Subject, Direct Object, Indirect Object
 - II. a. Absolutive
 - b. Absolutive, Ergative
 - c. Absolutive, Ergative, Dative
5. Categories

Agreeable categories: Syntactic relation; Person, Number, Gender, Class; Definiteness

Demarking categories: Syntactic relation; Humanness, Definiteness, etc.

0.1.

一般に文法用語の「呼応」と「一致」は無差別に **agreement, concord** の訳語として使用されている。この稿では、より正確な理解と厳密な分類を目指すため、両語を区別して利用し、統語関係 (or 文法関係) のレベルで辞項間に成立する形式的共起制限あるいは連動現象を「呼応」と呼ぶ。例えば、ある言語において動詞は主語及び直接目的語NPと‘呼応’すると述べる。一方、呼応の現実の事例の各々を「一致」と名付けることにする。ある一つの文で、特定の主語NPと動詞とが‘一致’しているのが見られる。呼応は「呼応形態素」を形式的標識として表現することによって達成される。呼応を管制する文成分を「呼詞」、呼応形態素を受け入れる要素を「応詞」と呼ぶことにする。従って、呼応形態素は異なる一致異形態の根底にある抽象的単位でもある。呼応・一致において文法関係でない意味統語の特性が呼応形態素の形式変動に示差的に係わることを「相応」という。多くの言語で、動詞は名詞句の人称・数と‘相応’している。

0.2.

自然言語には多種多様な呼応・一致が見られ、伝統的な文法の語形 (形態) 論の中で相当大的な比重を占めているのが普通である。しかし、呼応現象そのものについて多くは語られず、呼詞と一致標識を持つ応詞との統語的關係としてよりはむしろ、呼応の形態論的反映である応詞の語形変化パラダイム作製の問題として扱われていた。構造主義文法は応詞と呼応形態素の峻別に意を注いだものの、異形態・形態素の設定とその平板的記述を越えた洞察には至らなかった。シンタクス中心の変形生成文法において、‘浅い層’の現象である呼応は殆ど顧みられることのない忘れられたテーマになった。**Passive, Raising, Reflexive** などの循環規則が活発な論義を呼んでいるのを尻目に **Post-cyclic Rule** の **Agreement** は、たいていの場合、付け足しのルールとしてただその存在を言及されるか、あるいは全く無視されることも珍しくない日陰者に甘んじなければならなかった。それは一言語の垂直的派生の中で呼応は単純で魅力が乏しく言語学徒の関心を刺激しなかったためであろうか。**Agreement** 軽視の風潮の底流にあったのは、呼応を何か余剰的な、他から自動的に決まる、機能的に無価値な駄物のように見る先入見である。また、この理論が‘一致離れ’した英語を主食として育ったその体質にも責任の一端があるのかも知れない。とは言え、生成文法において呼応は一個の文法ルールとして独立した地位を認められ、**dynamic** な呼応観が生まれた事は少なからぬ進展である。

呼応・一致の豊富なスペイン語は、この種のアプローチで大きな研究成果をあげつつある言語の一つと言えるが、やはり **Agreement** はついでに触れられる規則であり、真剣な考究の主役に選ばれることはなかった。

言語使用面における一致の揺れを計数的に調査した Fält⁽¹⁾ の労作は現代スペイン語の一致〔呼応でない！〕を本格的に扱った唯一のものと思われるが、文語 Corpus の、しかも‘数’相応に局限されているのが惜まれる。「一致」変異の問題に対しては Goldin⁽²⁾ が指適するように、Agreement を可変規則 (variable rule) に属す部分と無条件的な性格の部分とに分ける必要がある。前者について言えば、社会言語学的要因をも考慮した確率の計量化が検討されるべきだろう。

0.3.

筆者が統語的呼応一般に取り組む動機の一つは、スペイン語に見られる目的語と同一指示の付接代名詞の共起が agreement にあたるのではないかと考えていたことであった。多数の言語に存在する多様な一致の様式に目を向けるとき、何が呼応と呼ばれるのか、十分な性格規定がなされておらず、何が呼応と呼ばれないのか、その境界線は甚だ不明瞭であることがわかった。そして次のような疑問を抱いた。呼応規則とはどのようなルールであるのか。世界の自然言語に見られる agreement にはいくつかの類型があるか、又、呼応のあり方に普遍的な制約があるか。もし有るとすればそれらはどのようなものか。名詞句、とりわけ主語又は最も顕出した文法関係を結ぶNPが動詞に呼応するのは何故だろうか。

本稿は対象を、名詞句と動詞類（助動詞の構成素を含む）の間に作用する呼応に限定する。動詞とその意味に共演する諸成分を代表する名辞との一致・呼応関係は、その他の文要素間のそれに比べ、文の根幹に対する支柱として遙かに重要な位置を占める。尤も、名詞—形容詞、名詞—冠詞など各種の呼応に対する Hierarchy が存在し、その中で名詞—動詞呼応が最も高くランクされるという証明はなされていない。すなわち、もしある言語に agreement が存在する時、様々な endocentric なタイプの呼応よりも外心的呼応が先ず出現すると言えるかどうかは定かでない。⁽³⁾

呼応がいかにして形成されたか、その起源と成立過程も興味ある問題である。この通時的側面に関する理解が共時態における呼応のあり方とその機能の解明に大きな助けとなることは間違いないだろう。無呼応から呼応言語へ史的変身した例や、逆に脱呼応化を完遂した言語又はその途上にあると推察される状況も散見される。このような agreement の成熟・退化の各段階が存在する事実は、呼応形態素の起源を呼詞のいわゆる“話題化”とその痕跡たる同一指示代名詞の文法化とみなす Givón⁽⁴⁾ の注目すべき仮説でうまく説明できそうである。残念ながら、小論では資料の不足もあり、個々の言語の史的経過まで立ち入り検討することはできなかった。従って、他の分析者によって通時的考察がなされている場合にのみ、若干それらに言及するに止める。

0.4.

このテーマを追求するに当って、典型的に異なる出来るだけ多くの言語を取り上げるように努めたが、この方法には大きな危険が内在することは明らかである。引用した言語の殆どすべてが筆者にとって未知のものであり、他の研究者の記述に全面的に頼らざるを得なかった。それらは特に呼応に焦点をあてて書かれているわけではなく、断片的な取扱いや不正確な概説から判断することを与儀なくされることもあり、勢い、間違った速断を下し易い。又、資料そのものの信憑性

を検討する知識がない故、微少な不正確を明白な誤りへと改悪する恐れも少なくはない。

一方、一言語あるいはよく習熟した2,3の言語のみに目を向け、他言語の状況を考慮せず、呼応の範囲を限定・規定しようとすることは不可能ではない。しかし、このようにして出された結論が普遍性を見失い、特定言語内の他の文法事象の説明の便宜を優先した都合主義に陥り、かつその弊害を看過する危惧は非常に大きい。両者に伴うそれぞれの危険を秤にかけた上で、あえて **typological adequacy**⁽⁵⁾ の要請に合致する前述の方法を採用ことにした。それ故、小論ではまず諸々の言語で動名呼応が“いかに”行なわれているかを調べることに焦点を絞り、その実体を把握するのが目標である。この作業の成果がもし十分であれば、“なぜ”呼応現象が多く言語に存在するのか、呼応と、呼応でないと一般にみなされている現象、**v.gr.** ある種の代名詞化の間にどのような関連があるのか、などの疑問を解く手掛りとなるものと思われる。

§ 1 では一般に呼応と称されている現象を広く各言語に調べ、大ざっぱなタイプに分類する。

§ 2 は「変則呼応」**i.e.** 一定の表層文法関係での呼応を破る特殊な **agreement** のケースを扱う。§ 3 は呼応の萌芽とも見られる“話題化”との繋がりを見、呼応・不完全呼応・不呼応の境界線を探る。最後に § 4 で、文法的呼応の暫定的規定を試み、呼応の多様性を構成する要因を整理する。また通時変化における **agreement** 現象の消長サイクルを示唆する。

1. 呼応の類型

1.1. 一致標識の形式

名詞類を呼詞、動詞類を応詞とする呼応がどのような手段で実現されるかは一様でない。

1.1.1.

最も普通に見られるのは一定の音形 **segment(s)** が一致の **marker** として出現するケースである。この呼応形態素は、1.2.以降の各例に示されるように、接頭辞・接尾辞・接中辞・付接辞などとして動詞に密着・融合・付接されるのが常である。

1.1.2.

定音形の **marker** ではなく音韻的過程によって規定される音形 **segment(s)** で一致を示す言語がある。

Quechua⁽⁶⁾ の 1 sg. は幹末母音の重複あるいは長音化によって表示される：

- | | | | |
|-----|----|------------|---------------------|
| (1) | a. | taki-i | ‘I sing’ |
| | | miku-u | ‘I eat’ |
| | b. | taki-lqa-a | ‘I sang’ |
| | | miku-lqa-a | ‘I ate’ |
| | c. | tak-qlu-i | ‘I have just sung’ |
| | | mik-qlu-u | ‘I have just eaten’ |

上に見られるように語根末母音は一定でないし、また時制・相 **marker** が付加されるとき(1b, 1c)はその母音が長化されるため、**constant** な音形を示さない。

主語との‘数’相応が存在する Samoan⁽⁷⁾ は動詞の第 1 or 第 2 音節を重加 (reduplicate) して複数主語をマークするものが多い。

(2)	sg.	pl.	
	'a	'a'ai	'to eat'
	moe	momoe	'to sleep'
	alofa	alolofa	'to love'
	maliu	maliliu	'to die'

アンダルシア東部のスペイン語 Granada 方言では、標準カスティリヤ方言の語末—s 消失の代償として新音素と母音調和が出現した。動詞の 2sg., 3sg. の指標となる一致 marker は一定の音形を持たず、両形は動詞が含む全母音の広狭で対立する。例えば(3)の場合、

(3)	2 sg.	kóře	[corres]	'you run'
	3 sg.	kóře	[corre]	'he, she runs'

活用類を表わす母音 E の半広母音 [ɛ] が 2sg. 中間母音 [e] が 3sg. を示すと述べるだけでは不十分で、幹母音をそれぞれ広狭に調和させる音韻プロセスを同時に伴うことを指摘せねばならない。なお、後者の母音調和ルールは名詞・形容詞の sg. –pl. 対立にも現われるが、純粋な音韻規則ではなく、形態論的に条件づけられている。

1.1.3.

超分節素が一致を標識化することがある。Chatino (Oto-Manguean, Mexico)⁽⁹⁾ では主語の人称の区別をするのに音調が利用される。この場合の超分節的呼応形態素は、Elson & Pickett に従え

(4)	kú	'I eat'	tá	'I give'
	kú	'you eat'	tá	'you give'
	kù	'he eats'	tà	'he gives'

ば(5)になる。同じ Oto-Manguean グループに属すメキシコの Palantla Chinantec⁽¹⁰⁾ にも類似の音調

(5)	ý high tone + nasalization	: 1 pers actor
	ý high tone	: 2 pers actor
	ỳ low tone	: 3 pers actor

呼応が見られる。次の例で動詞 ?e 'to teach' は 1sg と 3 pers 主語のときと 1 pl. 2 pers 主語の場合

(6)	?e ¹²	hní ²	'I'm teaching'
	?e ²	hniaw ³	'We (incl) are teaching'
	?e ²	hnie ^{?3}	'We (excl) are teaching'
	?e ^{?2}	?niw ²	'You're teaching'
	?e ^{?2}	?nia ^{?12}	'You (pl) are teaching'
	?e ¹²	za ²	'He is/They are teaching'

合で異なる声調で特徴づけられる。またこの言語では同じ segment の動詞語形が声調により異なる相・時制を持ち得る。

Mongbandi (Congo)⁽¹¹⁾ の動詞も主語の sg./pl. を tone で区別する。(7)は動詞の **completive aspect**

(7) sg.	pl.	
ngbò	ngbó	‘swam’
mā	má	‘heard’
yó	yó	‘carried’
bàtà	bātá	‘guarded’
hākà	hāká	‘taught’
kōló	kōló	‘pierced’
díkò	díkó	‘read’

形である。単数形には 7 種の声調が認められるが複数主語の動詞形は 1 音節語で \acute{v} , 2 音節語では $\bar{v}\acute{v}$ に統一されるのが特色である。強勢による呼応を組織的に示す言語を発見することはできなかったが、スペイン語の規則変化動詞に現われる次のような対立は、時制又は法の弁別を不可分

(8) tómo	‘I take’	tomó	‘he took’
tóme	‘I, he take’ (subjunctive)	tomé	‘I took’

的に含んでいるとは言え、**agreement** の中で **stress** が決定的な働きを演じている。ただし **paradigm** 全体の中でこのような超分節要素に依存する部分は僅かであり、主要な呼応手段はやはりセグメンタルである。

1.2. 呼詞の削除可能性

一致を引き起こした名詞句が明示されない文を許容する言語と、しない言語がある。これは呼応形態素が単独で承前代名詞の機能を維持できるか否かの裏返しである。

1.2.1. $N_1 N_2 \cdots V_{n_1 n_2} \cdots$ ⁽¹²⁾

英語, 独語, オランダ語, 仏語 etc. では主語と **agreement** が成立するが, 限られたタイプの文構造を除けば通常の独立主文で主語を削除することはできない。⁽¹³⁾ **Keenan** は主語の格下げを主要因とする関係論的受動を性格づける上で **Subject Presence Condition** なる可変的条件を提案している。彼によれば, 各言語には表層主文が独立 NP 主語を要求する一定の程度が存在し, それを **Subject Number** と呼ぶ。前掲諸言語は高い **Subject Number** を持つと言える。主語 NP の義務性が一般に強いといわれる言語間にも直観的にその差が認められるようで, v. gr. ロシア語はやや削除に寛容であるように思われる。このような言語間の差をどのように数的に捉えるかはかなり厄介な問題であり, 果して正確な計量化が可能なのか疑問ではあるが, **agreement morpheme** の性質と無関係ではないだろう。

1.2.2. $(N_1 N_2 \cdots) V_{n_1 n_2} \cdots$ ⁽¹²⁾

大多数の呼応言語で呼詞は任意的に削除され得る。古典・現代ギリシャ語, ラテン語, ロマンズ諸語 (仏語を除く), Turkish, Swahili・Kinyarwanda etc. の Bantu 諸語, Yupik (Eskimo), Buriat (Mongolian), Basque, Hungarian, Quechua, Arabic

など異なる系統に幅広く分布する。主語・直接目的語NPが省略され得る(9)の ⁽¹⁴⁾Swahili 文はその好例であろう。実際 **agreement** がある程度充実すれば、呼詞は必然的に非義務的になり、代名詞

(9) a. Juma a - li - m - piga Faru.

he - past - him - hit

‘Juma hit Faru’

b. A - li - m - piga. ‘He hit him’

独立形が併用されるのはむしろ意味的に有標な場合で、そのNPを対比的に用いる強意構文であるのが普通である。しかし、**Subject Number** の低い言語が必ず呼応を示すというわけではない。日本語のように呼応らしきものが存在しない文でも、主語・目的語を相当自由に削除できる場合があるからである。**Subject Number** の高低を条件づける因子として、呼応 **marker** の十全さから来るNP復元の容易度と、**anaphora** そのものが具体的な統語形態の標識を必要としないimplicitな脈絡の現用論的復元性によるものとの2種の場合を区別をしなければならないことがわかる。

削除可能タイプの言語間にもその度合いに相違がみられることが予想できる。同一言語内でも方言差・文体差がある。ポルトガル語の例をとれば、口語ブラジル方言⁽¹⁵⁾は現代語において以前より**Subject Number** は高くなっており、又文語体よりも削除の可能性は小さいと言われる。

1.3~1.8. 呼応の項数

1.3.0. 単項呼応 $N_1 V_{n_1}$ ⁽¹²⁾

1つの呼詞のみが呼応に参与し、動詞が単一の呼応形態素をとるタイプの呼応である。

1.3.1.

動詞が最も **agree** しやすいNPの文法関係は主語であると考えられる。主語とは呼応がなく目的語が呼詞となるような対格型言語は存在しないようである。⁽¹⁶⁾もしこれが事実ならば、ある言語に呼応を制御するNPがあるとき、それは主語を含むという一般原則が立てられる。下記の言語は主語を呼詞とする呼応のみをもつ。

English, Dutch, German, Russian, Polish, Serbo-Croat, Turkish, Persian, Buriat

1.3.2.

大抵のコカサス系言語 v. gr. Avar ⁽¹⁷⁾では絶対格 (**Absolutive**) NP が単一呼応を引き起こす(10)。**Langgus (Australian)** ⁽¹⁸⁾の動詞も **Absolutive** と‘数’相応する。**Punjabi** では一部の時制で **ergative** 構文になり、動詞は絶対格に一致するが、これは後述の部分変則一致で扱う。

(10) a. was w - atf'ana

boy (m.) m - came

b. jas j - atf'ana

girl (f.) f - came

c. tfu b - atf'ana

horse (n.) n - came

$$\underline{N_1} \quad V_{n_1, n_1}$$

1.4.1.

(11) A Katayniŋ a vëñe.
 3 sg. fem 3 sg.
 ‘Catherine comes’

(13) U vênê a Katayniq.

(14) U čøve. 'It is raining'
 (15) U se vā a Zēna. 'On va à Gènes' (French)

付接一致詞は **Friulan**²⁰ でさらに義務度を増し、動詞に目的語の **clitic** が先行する場合を除いて省略することはできない (Cf. 18a)。しかし、2 人称単数 **clitic subject** は (18b) のように再帰動詞と共に起する。**Friulan** の自由形及び付接形主語代名詞は (16) の通りで、(18a) を除き各文に **clitic** による二重一致が見られる。

(16)			sg.		pl.	
	1.	2.	3 mas	3 fem	1.	2. 3.
自由形	jo	tu	lui	je	no	vultris lor
付接形	'o	tu	al	'e	'o	'o 'a

(19) Martin al jere un biel omp.
'Martin was a handsome man'

(20) Linde 'e jere squasi biele.

'Linda was almost beautiful'

1.4.3.

同様な呼応は Romagnol⁽²¹⁾ にも指摘されるが, Friulan よりも付接辞の使用は広範囲に定着しており, 関係節の中でも又目的格の付接代名詞の前でも, 重合した様々な形をとって現われるのが特徴である。この言語にも Genoese の(13)に似た一致構文があるようで,(26)において turtureina

(21)	sg.				pl.			
	1.	2.	3 mas	3 fem	1.	2.	3 mas	3 fem
自由形	me	te	lo	lì	nò	vò	lò	
付接形	a	t'	e'	la	a	a	—	al
	(before vowel)		l'	l'		j'		agli

(22) Te t'è da fê. 'You have to do'

(23) Lo e' dsé. 'He said'

(24) E're um la dasé. 'The king gave it to me'

um < e' + -m

(25) A t'li farò me.

'I'll make them for you'

(26) E' chenta una turtureina.

'A turtle dove is singing'

が始めて言及される rheme であるため, 主語が女性名詞であるにもかかわらず 3 sg. mas. の e' が clitic として使用される。

1.4.4.

十分な data がなく断定できないが Keenan の引用している Kapau (Papuan)⁽²²⁾ の例文(27)で, 同一指示の代名詞と動詞内部の marker とが重複して主語と一致していると見られる。

(27)	amä'ä	aqoä	qaP-a
	man	they	come-they
	'The man are coming'		

1.5. 二項呼応

1.5.0. $\boxed{N_1 N_2 \quad V_{n_1 n_2}}$

単文で異なる統語関係の 2 つの NP と動詞が同時に呼応するタイプである。呼応形態素は必ずしも形態上 2 分されないが, 2 呼詞を mark している。

1.5.1.

N_1 , N_2 が主語及び目的語(主に直接目的語)の複合呼応を示す言語の数は非常に多い:

Serrano, Luiseño, Cahuilla, Cupeño⁽²³⁾ (いずれも Uto-Aztec); Classical Aztec

[Nahuatl]⁽²⁴⁾ ; Lakhota⁽²⁵⁾ , Tuscarora⁽²⁶⁾ , Kwtsaan⁽²⁷⁾ , Washo⁽²⁸⁾ , Tonkawa⁽²⁹⁾ , Potawatomi⁽³⁰⁾ ; Alongonquian Fox, Black-foot⁽³⁰⁾ ; Bella Coola⁽³¹⁾ (Amerindian); Sierra Popoluca⁽³²⁾ (México); Jaqaru, Kawki, Aymara (Peru)⁽³³⁾ ; Quechua⁽³⁴⁾ ; Maung, Maranungku (Australia)⁽³⁵⁾ ; Chi-Mwi=ni⁽³⁶⁾ (Non-Bantu, African); Pulo Annian⁽³⁸⁾ , Sonsorol⁽⁴⁰⁾ (Micronesian); Arabic⁽⁴¹⁾ , Maltese⁽⁴²⁾ ; Ge'ez, Amharic⁽⁴³⁾ (Semitic); Ainu⁽⁴⁴⁾

1.5.2.

N_1, N_2 が絶対格, 能格である ergative 型の呼応が若干の言語に見られる: Toyolabal (Mayan)⁽⁴⁵⁾ , Jacalteco⁽⁴⁶⁾ , Yupik (Eskimo)⁽⁴⁷⁾

1.6. 自他文二項呼応 $\boxed{N_1 \ V \ n_1 n_2]_s \ s[N_2}$

東部 New Guinea Highlands の Hua⁽⁴⁸⁾ には, 動詞が自己文だけではなく接続次文の主語と一致する構文が存在する。接続 2 文の最初の動詞には次の主語を mark する 7 種類の接辞と自己文の主語を示す 3 種の接辞が付加される。例えば(28)の英語文のもつ両義性は Hua の訳では (29a, b)

(28) He hit him and he ran away.

- (29) a. ebgí - ga - na korihie
hit (3 sg) (3 sg) run away (3 sg)
'He_i hit him_j and he_j ran away'
b. ebgí - φ - na korihie.
hit (3 sg) run away (3 sg)
'He_i hit him_j and he_i ran away'

のように解消される。(29b) で次文主語と同一の主語は φ 形で mark されるため, -ga で以って別主語を明示する (29a) 文と区別される。

1.7. 三格二項呼応 $\boxed{N_1 N_2 N_3 \ V \ n_i n_j}$

1.7.0.

呼応に参与できる名詞句の文法関係は 3 種であるが, 動詞における呼応形態素の slot は 2 つしかなく, 一定の条件下で NP のうち一つは一致から排除される。

1.7.1.

Walbiri (Australia)⁽⁴⁹⁾ では主語・直接目的語・間接目的語が呼詞になり得るが, 特殊なケースを除いて一致形態素の連続は主語・目的語の場合に制限され, 具体的音形をもつ直接目的語と間接目的語 clitic は共起が許されないという。

1.7.2.

Neo-Aramaic (Semitic)⁽⁵⁰⁾ で動詞は対格・与格のいずれか及び主語と呼応する。中立的な構文又は対格が話題化された語順では対格が優先され, 与格が topicalize されると逆に与格の marker をとる。

1.8. 三項呼応

$N_1 N_2 N_3 \cdot V n_1 n_2 n_3$

1.8.0.

異なる文法関係をもつ 3 NP がそれぞれの index を応詞に表現させるケースである。

1.8.1.

呼詞が主語・直接目的語・間接目的語である Chinookan (Amerindian)⁽⁵¹⁾ の次の例文はこの型式の一致をよく表わしている。(31)に見られる Haya (Bantu)⁽⁵²⁾ の一致もこれと同様である。

- (30) a. ga - č - š - i - luda istamx išgunat ig? iyugt.
 past he it to him give the chief the salmon the old man
 ‘The chief gave the salmon to the old man.’

b. gačšiluda.
 ‘He gave it to him’

- (31) a. abakāzi ba-gi-mu-cumb-il-a kakûlw’ énkôko
 women they-it-him-cook-suffix kakulu chicken
 ‘The women cook chicken for kakulu’

b. ba-gi-mu-cumb-il-a.
 ‘They cook it for him’

1.8.2.

Basque⁽⁵³⁾ は能格・絶対格及び与格(受益者・受領者etc.の意味役割をもつ) 3 項の呼応接辞が動詞又は助動詞根に付着する。下文に含まれる Aux の didazu, diote は izan の屈折形である

- (32) (Zuk) niri eman didazu eskua.
 You to me give it-to me-you the hand
 ‘You gave me the hand’

- (33) Langilleak eskatu diote beren egunaria olako ugazabri.
 The workers demand it-to him-they their wage of the factory to the master
 ‘The workers asked the factory’s master for their wage.’

るが, root は ϕ で次の内部構成をもつ。

- (34) d - i - da - zu
 Absolutive Dative 1 pers Ergative
 3 pers sg 2 pers sg

- (35) d - i - o - te
 Absolutive Dative 3 pers Ergative
 3 pers sg 3 pers pl

1.8.3.

コーカサスの Abkhaz, Abaza, Ubykh, Adyghe, Kabardian の 5 言語は動詞に係わるすべての

NPが代名詞接頭辞として動詞に繰り返されると Catford^[50] は述べているが、例示から確認できたのは(36)の **Adyghe** における最大3項の一致で、絶対格、2つの能格（うち一つは意味上の **Comitative**）が呼応している。

- (36) se axem we w - a - de - s - çau'
I them thee thee-them-with-I-took
'I took thee with them'

1.8.4.

4項以上の多項呼応を義務的とする一致の実例を発見することはできなかった。4項・5項の一致が限定された統語的環境で生じ得ることは予想できないことではないが、^[51]動詞の意味に参与する名詞的構成素の各々がそのコピーを動詞句中に重出させるような言語 (cf. 前項1.8.3.) は、たとえ実在しても特殊なケースであろう。

1.3～1.8.3で見た呼応の項数と呼詞NPの文法関係をまとめると、主語と呼詞とする1項の呼応、主語・目的語の2項呼応、主語・直接目的語・間接目的語が参加する3項呼応が対格型言語に存在することがわかる。2項の **agreement** では主語・直接目的語とのみ呼応する言語は見られるが、間接目的語・主語と呼詞NPとして、常に直接目的語と一致しない言語はなかった。両目的語のどちらが優先されるかは個別言語の特定文脈により一定しないが、呼応体系全体としてみれば直接目的語の方が優位にあると考えられる。即ち、ある対格言語の呼応に参加する呼詞の組合せは次のいずれかである。この事実は関係文法で主張される文法関係の階層、主語>直接目的語>間接目的

(37) i) 主語

ii) 主語・直接目的語

iii) 主語・直接目的語・間接目的語

語、と符合する事に注目されるし、また文法項 (**term**) と非文法項 (**non-term**) の動詞に対する統語的緊密度の差が明確に反映されていることがわかる。動詞意味の核として共演する中心的な成分がとる文法関係がその出先を動詞構成素複合の中に持ち得るのに対し、その意味役割において衛星的な他の周縁辞項が呼応に参加しないのは当然と言えよう。しかし、この相違も絶対的な分岐点があるのではなく、**Beneficiary** のように **Dative** に近い、あるいはそれと同一視される関係は文法項並に呼応を示す場合がある。

1.8.5.

能格型の格体系の言語は対象となった数が不十分であり、断定的な事は言えないが(37)に平行して次の呼応が見られた。つまり、**ergative system** では絶対格>能格>与格のハイアラキー

(38) i) 絶対格

ii) 絶対格・能格

iii) 絶対格・能格・与格

が認められることを示唆する。能格言語には、対格言語における直接目的語から主語への昇格

(=受動)に類する能格から絶対格への格上げ, i. e. **Antipassive** (反受動)が存在する他, 主語が直接目的語に比べて一般にそうであるように, 絶対格は能格よりも形態的に **unmarked** である (Cf. **Greenlandic Eskimo**⁽⁵⁶⁾, **Basque**) などパラレルな関係を考慮に入れば, 呼応への係わり方で得られた上の序列は単なる偶然とは思われない。以上の事実(37)(38)を統一したベースで呼詞の統語関係に関する階層を一般化する余地があることを暗示しているが, 筆者は次のような **universal**が存在することを指摘するにとどめる。

- (39) もし一つの言語で動詞がある文法関係を結ぶNPと呼応する時, その文法関係よりも上位にランクされる文法関係を結ぶNPも呼詞である。

1.9. 呼応範疇

1.9.0. 相応カテゴリー

一致がどのような形態・統語的範疇を介して行われるかは言語により異なるが, 人称・数・性(又はクラス)のいずれか, あるいはすべてが呼応形態素の形式に作用する場合が多い。多項的呼応を示す言語では文法関係そのものが重要な相応カテゴリーになり得ることは明らかである。

相応カテゴリーに応じて呼詞自体にも形態論的語形変化がみられるのが普通であるが, **Sonsorol**⁽⁴⁰⁾ (**Micronesian**) の主語一致のように呼詞は‘数’の形態変化を持たず呼応代名詞形に主語の‘数’が標示されることがある。またロシア語の過去時制でも, 性カテゴリーに中立の代名詞に一致する

- (40) Я, Ты (mas) был дома.
Я, Ты (fem) была дома.

動詞は現実の指示対象に従い性別が示される。逆に, 呼詞においてなされる形態的区別に係わる範疇が呼応形態素で中和される事例は珍しくない。例えば, スペイン語で3人称 [+human] NP には一般に‘性’が付随するが, 一致標識はそれをマークしない。同一言語内でも, 時制・相など

- (41) a. Los muchachos vienen
The pl. boys pl. come 3 pl.
mas mas
b. Las muchachas viene n
The pl. girls pl. come 3 pl.
fem fem

に左右されて, しばしば機能するカテゴリーの異動が起こる。ロシア語動詞は現在・未来形で主語の人称・数に相応して接尾辞を得るが, 過去時制では人称が関与せず, 数・性のみが一致を決定する (Cf. (40))。尤もこの現象はこれらの過去形が複合時制の過去分詞に遡るためであろう⁽⁵⁷⁾。数カテゴリーでは単・複のみあるいはそれらと人称を組み合わせた相応が多いが, 双数を含む三対立もいくつかの言語にみられる: 古典ギリシャ語, **Yupik (Eskimo)**⁽⁴⁷⁾, **Slovene**, **Sorbian (Slavic)**⁽⁵⁸⁾, **Cherokee (Amerindian)**⁽⁵⁹⁾。Iraqi Arabic⁽⁶⁰⁾ では呼詞の主語名詞は **dual** 形をもつが応詞は通常 **plural** 形でそれを受ける。性 (gender) が一致に関与する例はセム語に広く見られる。性別体系が

細別化されるとアフリカ Bantu 諸語のようなクラス範疇となる。(42)は Haya (Bantu)⁽⁶¹⁾ の名詞 class marker (接頭辞) と SAP (主語一致代名詞), OAP (目的語一致代名詞) の一覧表である。

(42) Haya のクラス呼応体系

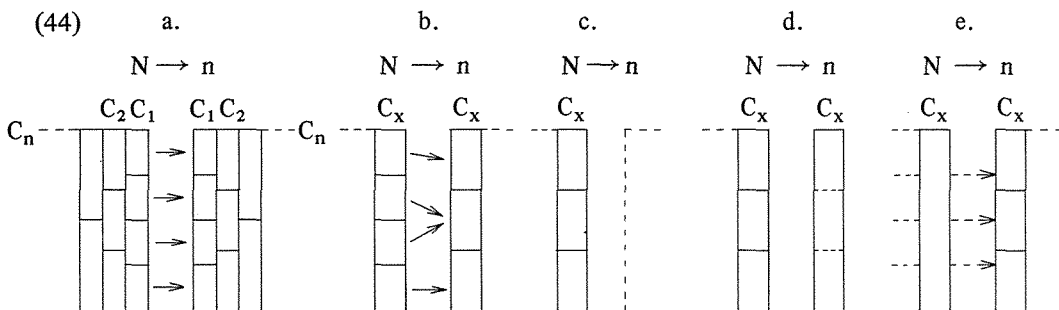
クラス	名詞 prefix	例	SAP	OAP
1.	mu-	mu-ntu (person)	a-	-mu-
2.	ba-	ba-ntu (persons)		ba-
3.	mu-	mu-kôno (hand)		gu-
4.	mi-	mi-kôno (hands)	e-	-gi-
5.	i-/li-	i-cûmu (spear) lí-ino (tooth)		li-
6.	ma-	ma-cûmu (spears)		ga-
7.	ki-	ki-ntu (thing)		ki-
8.	bi-	bi-ntu (things)		bi-
9.	N-	m-bógo (buffalo)	e-	-gi-
10.	N-	m-bógo (buffaloes)		zi-
11.	lu-	lu-go (fence)		lu-
12.	ka-	ka-húka (small insect)		ka-
13.	tu-	tu-kúka (small insects)		tu-
14.	bu-	bu-húka (small insects)		bu-
15.	ku-	ku-gulu (leg)		ku-

名詞は prefix の前に pre-prefix 母音をとり, 例えば(31)の abakazi (women)は(43)のように分解でき,

(43) a - ba - kâzi
 pre-prefix class 2. stem

名詞接頭辞と同形の ba が呼応形態素としても現われている。

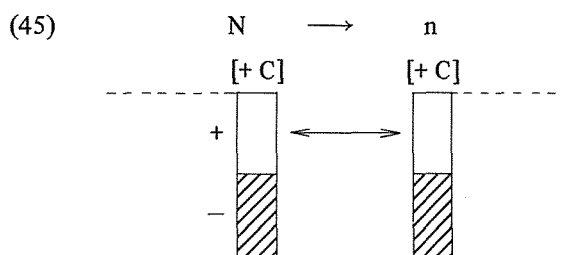
要約すれば, 相応カテゴリー C_1 --- C_n がすべての「一致」において(44) 図の如く, その下位範疇を全幅的に動詞へ転写され標識化されるのは稀で, 下位分類が変更される一致(b), 呼詞を範疇



化しているカテゴリーが応詞にないケース (c), あるいは若干の一致でそれが **mark** されない (d), 逆にNに顕在しないカテゴリーで一致 **marker** が区別される場合 (e), etc. が頻繁に起こる。

1.9.1.

前項で、呼応・一致形式の決定に係わる統語（意味）の特徴を相応カテゴリーと称したが、**Pulo Annian** の目的語における **[definite]**、**Sonsorol** における **[Human]** の素性はそれらとやや異質である。このカテゴリーは当該言語の呼詞と呼詞でないNPを区別する機能を持ち、プラスに指定される時のみ一致が成立するので、呼応形態素は呼詞NPが **[+ definite]** あるいは **[+ Human]** であることを間接的に **mark** している。言い換えれば、これらの素性は一致形態素間の形式的相



違を引き起こす能力を欠いている点で相応カテゴリーと区別される。ただし **Agreement Rule** に言及されなければならない素性という意味では、後者と同類の‘呼応カテゴリー’の一つである。人称・数・性・クラス等は呼応規則において α 規約を利用して複写されなければならない素性であるが、上述の〔定性〕〔人間性〕は正指定のまま呼詞に移されるか、又はしかるべき形態素の挿入を **trigger** する別々の司令要素に置換されれば十分である。この意味では、1.8.で分類した文法関係の各々、v. gr. 「主語である」、「絶対格である」etc. という特徴と同じで、一致の行なわれる範囲を限定する‘呼応条件カテゴリー’である。

1.9.2.

多項呼応の言語では、異なる文法関係項の呼応に同一相応カテゴリーか少なくとも何らかのカテゴリーが共通して作用することが多い。例えば、主語が性・人称・数で相応すれば直接目的語も同じ範疇で呼応するか、あるいは人称・数のみが相応するような例が普通である。しかし **Hungarian**, **Yurak**, **Mordwin**, **Ugric**, **Sam N (Uralic)** ⁽⁶²⁾ などに見られる定活用と不定活用 (or **Objective conjugation/Subjective conjugation**) の二系列屈折のように、呼応文法関係間に相応範疇の共有がないこともある。即ち、**Hungarian** の(46)では主語は人称・数で相応するが、直接目的語とは〔定・不定〕とのみ相応する。

- (46) a. Várom a fiam. ‘I am waiting for my son’
wait (1sg def.)
b. Várok valakit. ‘I am waiting for somebody’
wait (1sg indef.)

また、**Tabascan**, **Dargi**, **Lak (Caucasian)** ⁽¹⁷⁾ で、他動詞は目的語 (i.e. 絶対格) と「クラス」

で相応し、主語（ i.e. 能格）とは「人称」で相応すると報告されている。

（未完）

* 本論の草稿は関西スペイン語学談話会第28回例会（March 4, 1978: 大阪外大）において “On the typology of Nominal-Verb Agreements” の題で口頭発表された。

〔注〕

1. Gunnar Fält, *Tres problemas de concordancia verbal en el español moderno*. Uppsala, 1972
2. Mark G. Goldin, “Two variable syntactic rules in Spanish.” -1975 Colloquium on Hispanic Linguistics., Washington, D.C., p.27
3. 性カテゴリーだけについて言えばGreenbergはむしろ、名詞・形容詞呼応の優位を示唆している：
Universal 31. If either subject or object noun agrees with the verb in gender, then the adjective always agrees with the noun in gender. (Joseph H. Greenberg, “Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements.” -Universals of Language. (ed.) J. Greenberg, Mass. Cambridge, 1963. p.93)
4. Talmy Givón, “Topic, pronoun, and grammatical agreement.” -(ed.) Charles N. Li, *Subject and Topic*, New York, 1976. pp.149-188
5. Cf. Simon C. Dik, *Functional Grammar*. Amsterdam, 1978. p.8
6. Rodolfo Cerrón-Palomino, *Gramática Quechua-Junin-Huanca*. Lima, 1976. p.164
7. C. C. Marsack, *Samoan*. Norwich, 1962. pp.35-6
8. Joan B. Hooper, *An introduction to natural generative phonology*. New York, 1976. p.39
9. Benjamin Elson and Velma Pickett, *An introduction to morphology and syntax*. Santa Ana, California, 1962. p.13
10. *ibid.* p.52
11. Eugene A. Nida, *Morphology : The descriptive analysis of words*. Ann Arbor, Michigan, 1946. pp.63-4
12. N呼詞, V動詞, n呼応形態素, () 随意的要素, subscript 同一指示をそれぞれ表わす。Nは任意的・義務的を問わず呼詞一般を指す。
13. Edward L. Keenan, “Some universals of passive in Relational Grammar.” -CLS 11 (1975), p.346-7
14. Edward L. Keenan, “Towards a universal definition of “Subject”.” -Subject and Topic (1976), p.308
15. Earl W. Thomas, *The syntax of spoken Brazilian Portuguese*. Nashville, 1969. p.95
16. Keenan は (op. cit. (1976) p.316) Avar, Mabuig で動詞は主語と一致せず目的語と呼応すると述べているが、これらの言語は能格体系であるため、他動詞構文で能格ではなく絶対格が呼詞になるという意味であろう。
cf. 次節1.3.2.
17. J. C. Catford, “Ergativity in Caucasian languages.” -NELS 6 (1976), p.37
18. Simon C. Dik, op. cit. p.168
19. Wayles Browne and Bartolo Vattuone, “Theme-rheme structure and Zenéyze clitics.” -Linguistic Inquiry 6 (1975). pp.136-40
20. D. B. Gregor, *Friulan : Language and literature*. New York, 1975. p.107
21. D. B. Gregor, *Romagnol : Language and literature*. Stoughton, Wisconsin, 1972. pp. 83 and 100
22. Edward L. Keenan, “On semantically based grammar.” -Linguistic Inquiry 3 (1972), pp.448-9
23. Ronald W. Langacker, *Foundations of linguistic analysis*. New York, 1972. pp.216, 218, 221, 228, 324, 328; 279.
24. Angel María Garibay K, *Llave del nahuatl*. Mexico, 1970. p.34
25. William A. Foley and Robert D. Van Valin, Jr., “On the viability of the notion of “subject” in universal grammar.” -BLS 3 (1977), p.298
26. Marianne Mithun Williams, “A case of unmarked subordination in Tuscarora.” -You take the high node and I'll take the low node. Chicago, 1973. p.89
27. Carol E. Slater, “The semantics of switch-reference in Kwtsaan.” -BLS 3 (1977), p.24
28. William H. Jacobsen, Jr., “A glimpse of the pre-Washo pronominal system.” -BLS 3 (1977), p.56
29. Peter Landerman and Donald Frantz, *Notes on grammatical theory*. Lima, 1972. p.39
30. Geoffrey K. Pullum, “Word order universals and grammatical relations.” - (eds.) Peter Cole and Jerrold M. Sadock: *Syntax and Semantics Vol.8* (1977), pp.267-8

31. Philip W. Davis and Ross Saunders, "Bella Coola nominal deixis." -*Language* 51 (1975), p.847
32. Benjamin Elson and Velma Pickett, op. cit. p.51
33. M. J. Hardman de Bautista, "El jacaru, el kawki, y el aymará. -*Actas del Simposio de Montevideo. México, 1975.* p.187
34. Rodolfo Cerrón-Palomino, op. cit.
35. Edward L. Keenan (1972), op. cit. p.448-9
36. Charles W. Kisserberth and Mohammad Imam Abasheikh, "The object relationship in Chi-Mwi=ni, a Bantu language." -*Syntax and Semantics* 8 (1977), p.183
37. Edward L. Keenan (1972), op. cit.
38. Gerard M. Dalgish, "Locative NP's, locative suffixes, and grammatical relations." -*BLS* 2 (1976), pp.139-40
39. 田中幸子, "プロアナ語の性と数" 一言語 vol.7(1977) №6 pp.26,29
40. T. Cedric Smith-Stark, "The plurality split." -*CLS* 10 (1974), p.658
41. Wallace M. Erwin, A short reference grammar of Iraqi Arabic. Washington, D.C., 1963
42. Joseph Aquilina, Maltese. New York, 1965. p.101
43. Talmy Givón, op. cit. p.161-2
44. 服部四郎, "アイヌ語カラフト方言の人称接辞について" ——言語研究39 (1961), pp.1-20; 福田すず子, "アイヌ語の動詞の構造" ——言語研究30 (1956), pp.46-64
45. N. Louanna Furbie, "Subordinate clause in Toyolabal-Maya." -*You take the high node and I'll take the low node.* Chicago, 1973. p.10
46. Colette G. Craig, "Properties of basic and derived subject in Jacalteco." -*Subject and Topic* (1976), p.101
47. 宮岡伯人, エスキモーの言語と文化, 東京, 1978, pp.116-7
48. John Haiman, "Presuppositions in Hua." -*CLS* 12 (1976), pp.259-60
49. Kenneth Hale, "Person marking in Walbiri." -(eds.) Stephan R. Anderson and Paul Kiparsky : A Festschrift for Morris Halle. New York, 1973. pp.334-5
50. Talmy Givón, op. cit. pp.164-5
51. Edward L. Keenan (1972), op. cit. p.447
52. Ernest Rugwa Byarushengo, "Agreement and word order: A case for pragmatic in Haya." -*BLS* 2 (1976), p.90
53. Umandi, Gramatica vasca. Tolosa, 1976. pp.97-8
54. J. C. Catford, op. cit. p.43
55. 後述のようにスペイン語など一部のロマンス語にみられる, 付接代名詞形と目的語の共起を呼応と考えるならば, スペイン語には主語・直接目的語・受領者(又は経験者)・受益者の4項一致が出現する周辺的な場合がある。
56. Anthony C. Woodbury, "Greenlandic Eskimo, ergativity, and relational grammar." -*Syntax and Semantics* 8 (1977), p.310
57. Serbo-Croat では, clitic として弱化していると言え, 助動詞 *biti* が人称・数に一致する。Cf. Vera Javarek, Serbo-Croat. London, 1963, p.34
58. 千野栄一, 言語学の散歩, 東京, 1975, pp.302-3
59. John R. Krueger, "Two early grammars of Cherokee." -*Anthropological Linguistics*. 5-3 (1963), p.9
60. Wallace M. Erwin, op. cit. p.326
61. Ernest Rugwa Byarushengo, op. cit. p.96
62. Björn Collinder, Comparative grammar of the Uralic languages. 1960. p.244

(July 20, 1978)